

研究報告

母性看護学講義・実習における看護大学生の対児感情の変化

光貞美香¹⁾ 二宮寿美¹⁾ 長川トミユ¹⁾

¹⁾ 宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科

キーワード：看護大学生，母性看護学講義・実習，対児感情

I. はじめに

看護大学生にとって臨地実習は、知識と技術を統合する重要な授業科目であり、母性看護学では、主に母子とその家族との関わりの中で、学生自身が女性として男性としてその役割が担える大人になってほしいと望んでいる。

少子化が進んでいる現在、母性看護学において、児に対するイメージは母子との関わり方を左右するのではないかという考えのもと、筆者らは、看護大学生を対象に母性看護学実習前後における新生児イメージの変化を把握した。その結果、青年期にある学生が新生児との関わりに苦悩している課題を明らかにした¹⁾。その要因として、少子化・核家族化により学生が子どもと関わる機会が少なくなっていること、また学生自身きょうだいの触れ合い体験が少ないことから子どもと接する際に関わり方がわからず、不安を抱きやすいことなどが考えられた。

単純接触の法則²⁾は、人は頻りに顔を合わせるだけで肯定的感情は上昇することを示しており、また、杉山³⁾は妊婦体験用モデルの着用や胎児の発育を学ぶことで、講義前後で対児感情が肯定的変化を認めたと述べている。楨原⁴⁾らは新生児とのふれあいが女子看護学生の対児感情を高めていることを明らかにしており、実際の体験やふれあいにより新生児への接近感情が高まり、対児感情は肯定的に変化することがわかっている。そこで、今回は母性看護学講義・演習に胎児モデルとの接触を多く取り入れ、また臨地実習では受け持ち新生児と触れる経験が多くなるよう実習施設へ依頼することにより、新生児への接近感情が高まるのではないかと考えた。

対児感情測定には、「花沢の対児感情測定尺度」⁵⁾を用いて、講義前・講義後・実習後の3時期の接近感情得点（以下、接近得点と表す）、回避感情得点（以下、回避得点と表す）から対児感情の変化を検討した。接

近感情とは、愛着的すなわち子どもを肯定し受容する感情のことであり、回避感情とは、嫌悪的すなわち子どもを否定し拒否する感情のことである。

II. 目的

講義前・講義後・実習後の3時期の接近感情得点、回避感情得点から対児感情の変化を明らかにし、今後の講義・演習・実習展開に役立てる。

III. 研究方法

自己記入式質問紙による調査研究である。

1. 対象

対象者は、A大学看護学科3年生44名中有効回答が得られた41名（男子8名、女子33名）（回答率93.2%）である（表1）。

2. データ収集方法

データ収集期間は平成22年4月から12月である。

講義前は、3年前期母性看護学Ⅱの履修開始前、講義後は母性看護学Ⅱの履修終了時、実習後は3年後期の母性看護学実習終了後とし、その3時期に調査表を配布し、その場で回収した。

3. 調査項目

1) 講義前・講義後・実習後における対児感情：花沢⁶⁾による対児感情評定尺度28項目（表2）。

回答方法は4件法ですべての項目に、「非常にそのとおり」を4点、「そんなことはない」を1点として採点する。接近項目の合計を接近得点、回避項目の合計を回避得点とする。接近得点と回避得点の双方が高得点の場合には、アンビバレントな感情を持ち合わせているという。

2) 講義前：「きょうだいの有無」「これまでに小さい子どもに触れた経験の有無」等

3) 講義後：「最近小さい子どもと触れた経験の有無」等

4) 実習後：「新生児に触れた経験7項目（バイタルサイン測定，計測，観察，おむつ交換，沐浴，抱っこ，授乳介助）」「分娩見学の有無」「出生直後の新生児計測体験の有無」等

4. データの分析

結果の集計と分析には統計ソフト SPSS (18.0 Ver) を用いた。講義前・講義後・実習後の対児感情得点の変化，実習後の経験との比較には t 検定および Pearson の相関係数を求め，有意差の検定は5%の危険率をもって有意差あり，10%の危険率をもって有意傾向とした。

5. 倫理的配慮

実施にあたり，研究の主旨，方法，結果の公表について説明する文書を作成し，対象学生には口頭で説明し，協力を依頼した。回答用紙は厳重に保管し，適切な統計処理によって個人名は出ないこと，結果は報告資料として公表することなどを説明した。調査表の提出をもって同意とした。

表1 対象者の属性と講義前・講義後の
子供に触れた経験の有無

調査時期		人数	%
講義前	性別	男性	8 19.5
		女性	33 80.5
	きょうだい	あり	36 87.8
		なし	5 12.2
これまでに子ども に触れた経験	あり	37 90.2	
	なし	4 9.8	
講義後	最近子どもに 触れた経験	あり	17 41.4
		なし	24 58.6

表2 対児感情測定尺度28項目

接近感情	回避感情
あたたかい	よわよわしい
うれしい	はずかしい
すがすがしい	くるしい
いじらしい	やかましい
しろい	あつかましい
ほほえましい	むずかしい
ういういしい	てれくさい
あかるい	なれなれしい
あまい	めんどくさい
たのしい	こわい
みずみずしい	わずらわしい
やさしい	うっとうしい
うつくしい	じれったい
すばらしい	うらめしい

IV. 結果

講義前・講義後・実習後における接近得点・回避得点の平均点と新生児へのふれあい体験との関連を検討した。

1. 講義前・講義後・実習後の対児感情得点

1) 講義前の対児感情

講義前の接近得点は 40.32 ± 5.17 点，回避得点は 23.60 ± 5.76 点であった。きょうだいは，あり36名(87.8%)，なし5名(12.2%)で，一人っ子は1割強であった。あり群の接近得点は 39.89 ± 5.23 点，回避得点は 23.75 ± 5.70 点，なし群の接近得点は 43.40 ± 3.78 点，回避得点は 22.60 ± 6.73 点であった。

きょうだいの有無では接近得点，回避得点ともに有意差は認めなかった。これまでに小さい子どもに触れた体験は，あり37名(90.2%)，なし4名(9.8%)で，触れた体験がない学生が1割いた。あり群の接近得点は 40.30 ± 5.15 点，回避得点は 23.35 ± 5.84 点，なし群の接近得点は 40.50 ± 6.13 点，回避得点は 26.00 ± 4.96 点であった。接近得点，回避得点ともに有意差はなかった。

2) 講義後の対児感情

講義後の接近得点は 42.34 ± 5.06 点，回避得点は 23.32 ± 6.05 点であった。

最近小さい子どもと触れた経験は，あり17名(41.4%)，なし24名(58.6%)で，あり群の接近得点は 45.12 ± 5.41 点，回避得点は 23.53 ± 5.73 点，なし群の接近得点は 41.17 ± 8.33 点，回避得点は 25.38 ± 8.65 点であった。触れた体験の有無では，有意差は認めなかった。

3) 実習後の対児感情

実習後の接近得点は 42.80 ± 7.45 点，回避得点は 24.61 ± 7.56 点であった。

実習中に新生児と触れた経験(7項目)の有無・分娩見学の有無・出生直後の新生児計測・観察体験の有無について，接近得点・回避得点を表3に示した。実習中に新生児と触れた経験のうち，抱っこ経験の有無の接近得点に有意差が認められ ($P < 0.05$)，授乳介助経験の有無で有意傾向が認められた ($P < 0.1$)。

表3 児に触れた経験の有無と実習後の対児感情

N=41

経験項目	経験の有無	接近得点		検定	回避得点		検定
		Mean	± S D		Mean	± S D	
バイタルサイン測定	あり n=39	42.90	± 7.54	n. s.	24.41	± 7.63	n. s.
	なし n= 2	41.00	± 7.07		28.50	± 6.36	
新生児の計測	あり n=12	43.75	± 7.56	n. s.	23.08	± 4.90	n. s.
	なし n=29	42.41	± 7.50		25.24	± 8.41	
観察	あり n=34	43.35	± 6.85	n. s.	24.29	± 6.15	n. s.
	なし n= 7	40.14	± 10.07		26.14	± 13.00	
おむつ交換	あり n=19	42.63	± 7.39	n. s.	22.79	± 6.23	n. s.
	なし n=22	42.95	± 7.67		26.18	± 8.36	
沐浴	あり n=17	41.76	± 6.27	n. s.	22.88	± 6.22	n. s.
	なし n=24	43.54	± 8.23		25.83	± 8.28	
抱っこ	あり n=29	44.66	± 6.29	*	24.79	± 8.15	n. s.
	なし n=12	38.33	± 8.37		24.17	± 6.19	
授乳介助	あり n=25	43.52	± 7.32	n. s.	22.84	± 4.54	†
	なし n=16	41.69	± 7.74		27.38	± 10.28	
分娩見学	あり n=16	40.88	± 7.71	n. s.	24.69	± 6.94	n. s.
	なし n=25	44.04	± 7.16		24.56	± 8.07	
出生直後の新生児の身体計測	あり n=10	45.00	± 8.15	n. s.	24.90	± 4.98	n. s.
	なし n=31	42.10	± 7.20		24.52	± 8.29	
出生直後の新生児の全身観察の見学	あり n=20	41.45	± 7.49	n. s.	22.95	± 4.00	n. s.
	なし n=21	44.10	± 7.35		26.19	± 9.67	

*p<0.05, †p<0.1 (Unpaired-Student's t-test)

2. 対児感情の変化 (表4)

1) 講義前・講義後・実習後の対児感情の変化

調査対象者の講義前・講義後・実習後の接近得点は、各時期間には有意差は認めなかったが、講義前に比べ講義後は2.02点高くなっており、さらに講義後より実習後は0.46点上昇している。講義前と講義後、講義前と実習後の比較では上昇する傾向がみられた。回避得点は講義前より講義後は0.28点低くなっており、講義後より実習後は1.29点高くなっていったが、殆ど変化は認めなかった。

2) 男子学生の講義前・講義後・実習後の対児感情の変化

男子学生の講義前の接近得点は40.63±5.24点、回避得点は22.63±5.80点、講義後の接近得点は42.75±6.27点、回避得点は23.75±5.26点、実習後の接近得点は44.50±7.31点、回避得点は27.38±11.52点であった。

男子学生の講義前・講義後・実習後の接近得点は、各時期間に有意差は認めなかったが講義前より講義後

は2.12点高くなっており、さらに講義後より実習後は1.75点上昇している。講義前から実習後へと順次高くなっていくことがわかる。回避得点においても有意差は認めなかったが、講義前より講義後は1.12点高くなり、さらに講義後より実習後は3.63点高くなっていった。

3) 女子学生の講義前・講義後・実習後の対児感情の変化

女子学生の講義前の接近得点は40.24±5.23点、回避得点は23.85±5.82点、講義後の接近得点は42.24±4.83点、回避得点は23.21±6.29点、実習後の接近得点は42.39±7.53点、回避得点は23.94±6.32点であった。

女子学生の講義前・講義後・実習後の接近得点は、各時期間に有意差は認めなかったが、講義前より講義後は2.0点高くなっており、講義後より実習後は殆ど変化はなかった。しかし講義前から実習後にかけて順次高くなっていく。回避得点は講義前より講義後、実習後は殆ど変化はない。

表4 講義前・講義後・実習後の対児感情

項目	時期	接近得点	検定	回避得点	検定
		Mean ± S D		Mean ± S D	
全体 N=41	講義前	40.32 ± 5.17	†	23.60 ± 5.76	n. s.
	講義後	42.34 ± 5.06		23.32 ± 6.05	
	実習後	42.80 ± 7.45		24.61 ± 7.56	
男性 n=8	講義前	40.63 ± 5.24	n. s.	22.63 ± 5.80	n. s.
	講義後	42.75 ± 6.27		23.75 ± 5.26	
	実習後	44.50 ± 7.31		27.38 ± 11.52	
女性 n=33	講義前	40.24 ± 5.23	n. s.	23.85 ± 5.82	n. s.
	講義後	42.24 ± 4.83		23.21 ± 6.29	
	実習後	42.39 ± 7.53		23.94 ± 6.32	

†p<0.1 (Unpaired-Student's t-test)

3. 接近得点と回避得点における講義前・講義後・実習後の関連性 (表5)

講義前・講義後・実習後の相関を見ると、接近得点においては講義後と実習後との間に $r = 0.539$ ($P < 0.01$) の相関を認めた。回避得点においては講義前と講義後との間に $r = 0.722$ ($P < 0.01$)、講義前と実習後との間に $r = 0.313$ ($P < 0.05$)、講義後と実習後との間に $r = 0.355$ ($P < 0.05$) で相関を認めた。

表5 講義前・講義後・実習後の接近得点と回避得点の関連性

項目	時期	1	2	3
接近得点	1. 講義前	—	0.031	0.027
	2. 講義後		—	0.539**
	3. 実習後			—
回避得点	1. 講義前	—	0.722**	0.313*
	2. 講義後		—	0.355*
	3. 実習後			—

** p < 0.01, * p < 0.05

(Pearson correlation coefficient)

V. 考察

講義前・講義後・実習後における接近得点・回避得点の平均点から、A看護大学生はアンビバレントな対児感情は持っていないことが明らかとなった。母性看護学実習前後の対児感情を比較したいくつかの研究によると、実習後接近得点は高くなり、回避得点は低くなる^{7,8)}という報告がある。A看護大学生においても講義前・講義後・実習後についての接近得点は徐々に高くなる傾向にあり、講義や実習といった実際の体験が対児感情をより肯定的なものにしていることが考えられる。しかし、回避得点については低くなると予測

していたが3時期中、実習後がやや高くなる結果となった。これらの結果は、実習中に体験した内容に影響を受けているものと考えられる。よってここでは、対児感情に影響する体験と男女別にみた対児感情の変化に焦点をあて、今後の学習状況の把握に役立てるため、考察していきたい。

1. 講義前・講義後・実習後の対児感情に影響する体験

3 時期の接近得点は、講義前に比べて講義後にやや高くなり、講義後から実習後は殆ど変化は認めなかったが、僅かに上昇していた。

講義前の対児感情について、きょうだいの有無では、接近得点はなし群がやや高く、子どもとの触れあい体験の有無では、回避得点はなし群がやや高く、この結果は、きょうだいの存在や子どもとのふれあい体験は対児感情を左右する^{9,10)}という報告と同じものであった。また、講義では、母性看護技術のテキスト作成とそれを用いてのデモスト、演習では妊婦・褥婦・新生児モデルに触れる機会を多く取り入れ、また演習の講師に臨床指導者から直接的な指導を受けることを実施したことで、実習への意識づけや事前学習に活かしていくことができたと考えられる。

実習においては、実習施設との事前会議に、前年度の調査結果を示し、看護技術の見学と実施に向けての体制の調整を依頼することができ、新生児ケアの代表的な7項目(バイタルサイン測定、計測、観察、おむつ交換、沐浴、抱っこ、授乳介助)について3分の1から半数の学生が実際に経験する機会を得た。実習中に新生児と触れた体験では、抱っこ経験の有無において接近得点に有意差を認め、授乳介助の回避得点において有意傾向を認めた。抱っこや授乳は母子にとっては愛着形成を促進する行為である。母子の傍らで、そ

これらの行為を見学・介入する機会を持つことで、学生自身も新生児に対する愛着が芽生えているのではないかと考える。明らかな得点差としては表れなかったが、新生児との接触体験が看護学生の接近感情を高める¹¹⁾という報告同様、A看護大学生においても徐々に接近得点の上昇が確認され、接触機会を増やすことの意義が示唆された。

このような、新生児との実際の接触を意識した講義・演習をふまえて実習に臨んだ結果、学生の接近感情を高めることにつながり、それが講義後と実習後の相関として表れたといえる。それはすなわち、講義・演習で受けた印象はそのまま実習中へも影響していると考えられる。

一方、回避得点は講義前より講義後は僅かに低くなっていたが、実習後には講義前よりやや高くなっていた。講義を受けることにより新生児のイメージは一度良い印象へ傾いたが、実習で実際に接する中で、新生児を目の前にして、可愛さは増しても看護ケアの実際には、容易に入りきれない不安やどう接していいかわからないもどかしさがあることも窺える。さらに、講義前と講義後、講義前と実習後、講義後と実習後の各時期の間に相関がみられた。これは、生育歴の中で受け止めている新生児への否定的感情は講義後や実習後にそのまま影響し、その印象は講義や実習など学習を重ねても変化しなかったということを示している。これらは、母親の養育に対する肯定的感情、本人の生育歴などが影響していると考えられるものであり、接触体験を増やすだけでは改善されない課題もあることが浮かび上がった。しかし、実習期間内で拒否的感情が変化しなかったとしても、今回の経験により自己の対児へのあり様に気付くことができたのではないかと期待している。

2. 男女別にみた対児感情の変化

男子学生の3時期の接近得点は、講義前に比べて講義によって高められ、さらに実習後は講義前より高かった。男子学生の中には、母性看護学実習に入る前は非常に緊張し、自己の居場所も見定められない状態から、徐々に対象者からの気配りや指導者のサポートを素直に受け入れることができ、結果的には貴重な体験として満足感を表出できてきたことが示唆された。

回避得点は、講義前に比べ講義後高くなり、実習後さらに高くなっていた。男子学生は女子学生に比べ、実習での受け持ち対象者によっては、母親への看護技術の見学や実施の制限をうける機会が多いため、その分新生児との接触機会が多くなる。それが却って、どう関わっていいのかかわからないという不安や、モデルでしか触ったことのない新生児のイメージと乖離し、回避得点も高くなってしまったのではないかと考えら

れる。しかし、得点の変化はこれまでに関心の薄かった対象を自己が受け入れ始めたひとつの段階として、肯定的に考えていきたい。

女子学生の3時期の接近得点は、講義前に比べて講義後、そして実習後へと順次高くなり、先に述べた講義・演習・実習の体験が学習として積み重なり、肯定的な変化になって表れたと考えられる。それに比べて回避得点は講義前に比べ講義後は低くなったが、実習後は講義前より高く、3時期では一番高かった。一旦は講義により低くなった回避得点の実習により高くなった理由として、臨地実習で実際の新生児に触れたり、同じ女性として母親の話に耳を傾ける中で、可愛いだけではない命の重さ、子育ての大変さなども自分のこととして感じ取ったのではないだろうか。また、女子学生においては月経の順・不順や月経に対する認識なども対児感情に影響する¹²⁾と報告されており、これらも少なからず影響を与えているものであろう。それらにより女子学生では講義・演習と実習との乖離が生じたと考える。

VI. まとめ

母性看護学講義前・講義後・実習後の3時期に花沢の対児感情測定尺度を用いて調査を行い、接近得点・回避得点から対児感情の変化を検討し、以下の結果を得た。

1. 実習中の新生児抱っこ経験や授乳介助経験は、対児感情を肯定的なものに変化させていた。
2. 全体の講義前・講義後・実習後の対児感情では、接近得点は講義前から実習後に向かい、順次高くなっていた。回避得点は講義前から講義後に僅かに低くなっており、講義後から実習後は高くなる傾向であった。
3. 男子学生の講義前・講義後・実習後の対児感情では、接近得点・回避得点ともに、講義前から講義後に高くなり、さらに実習後高くなる傾向であった。
4. 女子学生の講義前・講義後・実習後の対児感情では、接近得点は、講義前から実習後に向かい、順次高くなっていた。回避得点は講義前から講義後はやや低いのが、実習後はやや高くなる傾向であった。
5. 講義前・講義後・実習後の接近・回避得点の関連は、接近得点においては講義後と実習後との間に相関を認め、回避得点においては講義前と講義後との間、講義前と実習後との間、講義後と実習後との間で相関を認めた。

VII. 今後の課題

本研究結果から、学生がもともと感じている新生児への否定的感情は講義後や実習後にそのまま影響し、

講義や実習など学習を重ねても変化しないという現状が明らかとなった。この感情は学生個々の生育歴、母子関係、など多くの環境因子が影響していると考えられる。それは看護を学ぶ学生であっても、学習体験だけで感情を変容させることは難しい。昨今、母性準備教育として母性看護関係者が積極的な活動の1つとして、同世代教育としてのピアカウンセリングを実施している。これは年代に近い大学生から受ける性教育は中学生や高校生の性のイメージを肯定化し^{13, 14)}自己決定力を高める^{15, 16)}と言われている。また、ピアカウンセリングを行う大学生も自己の母性意識を内省するとともに、対人関係能力の発達を促すことができ、教育を行う側・受ける側ともに効果的な成長が期待できる。その結果として、これまで関わりが少なかった子どもたちへも関心を高めることができるのではないだろうか。よって今後は、大学生を取り込んだ思春期教育を通して、早い段階から母性意識を高めていくことに、母性看護学領域の展望があると考えられる。

謝辞

本研究を行うにあたり、協力して下さいました学生の皆様に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 二宮寿美, 村山美香, 長川トミエ: 大学生の母性看護学実習前・後における妊婦・褥婦・新生児のイメージ変化, 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル Vol.3.No.3, 31-39, 2010.
- 2) 単純接触効果: <http://ja.wikipedia.org/wiki>
- 3) 杉山智春: 妊婦疑似体験授業前後の母性意識・対児感情の変化について, 看護・保健科学研究誌, Vol.5.No.1, 41-49, 2005.
- 4) 榎原文枝, 岡部恵子: 新生児との接触体験が対児感情に与える影響—母性看護学実習前後の対児感情の比較を通して—, 母性衛生, Vol.42. No.3, 315, 2001.
- 5) 花沢成一: 母性心理学, 医学書院, 65-70, 1992.
- 6) 前掲 5) , 67.
- 7) 北川明美, 森島昭子, 鹿野真由美: 母性看護学実習における看護学生の対児感情の変化(評定尺度を使用して), 母性衛生, Vol.49. No.3, 250, 2008.
- 8) 三浦真保, 穴戸路佳, 大森智美: 母性看護学実習が看護学生の対児感情に与える影響, 母性衛生, Vol.51. No.3, 271, 2010.
- 9) 前掲 4) , 79-85.
- 10) 濱耕子: 母性看護を習得する学生の対児感情の推移と関連要因, 母性衛生, Vol.45. No2, 170-179, 2004.
- 11) 前掲 4) .
- 12) 前掲 4) .
- 13) 栗田佳江, 杉原喜代美, 池田優子: 思春期ピアエディケーションと高校生に対するイメージとの関連, ヘルスサイエンス研究, Vol.12. No.1, 45-50, 2008.
- 14) 五十嵐世津子, 岩間薫, 千葉貴子: 大学生による中学生への思春期ピアカウンセリングの有効性, 弘前大学大学院保健学研究科紀要, vol.9, 49-55, 2010.
- 15) 前田ひとみ, 高村寿子, 渡邊至: 高校生を対象とした大学生による思春期ピアカウンセリングの評価(1), 南九州看護研究誌, Vol.5. No.1, 11-18, 2007.
- 16) 忠津佐和代, 長尾憲樹, 進藤貴子: 大学生の性感染症予防行動および避妊行動に対する意識・態度の実態調査 青年期ピアカウンセリングの基礎資料として, 川崎医療福祉学会誌, vol.19. No.1, 93-103, 2009.

参考文献

- 1) 武田江里子, 小林康江: 3歳児を持つ母親の18ヶ月児からの対児感情・対夫感情の変動とストレスとの関連, 母性衛生, Vol.50. No.3, 165, 2009.
- 2) 山本正子, 三嶽真砂枝, 小笠原加代子: 新生児期のタッチケアが母親の対児感情に及ぼす要因, 母性衛生, Vol.49. No.2, 261-266, 2008.
- 3) 中越利佳, 池田紀子, 山口雅子: 乳児接触体験からみた母性看護学実習と学生の対児感情の変容, 日本公衆衛生学会総会抄録集, Vol.66, 437, 2007.
- 4) 鈴木康江, 佐々木くみ子, 片山理恵: 思春期性教育活動に向けての基礎調査 中学生, 保護者, 教師の意識調査から, 母性衛生, Vol.45. No.4, 512-517, 2005.
- 5) 水野基樹, 田中純夫, 臺有桂: 医療保健と学校教育の協働による地域保健システム構築への組織論的研究, 順天堂大学医療看護学部医療看護研究, Vol.2. No.1, 29-37, 2006.
- 6) 関島英子, 齋藤益子, 木村好秀: 1ヶ月の乳児をもつ母親の健康感と対児感情に関する検討, 母性衛生, Vol.47. No.1, 62-69, 2006.